

サロンの文芸活動つづき

—李義山雜纂・義山詩集と枕草子・清少納言集—

目加田 さくを

李義山の雜纂に枕草子が酷似すること、その影響関係の問題については、既に拙著『枕草子論』昭五五年笠問書院刊で述べた。これは、そう簡單明瞭にはまいらぬのである。今回は、清少納言も家集をもつので、李商隱の詩集・雜纂と清少納言集・枕草子とを比較してみようと思う。拙著李義山雜纂注釈年私家版をもとに、今年以來、枕草子との比較を、毎年、「枕草子講読」受講の学生に課してきたが、実は、どうも、枕草子と義山雜纂との比較だけでは、不十分だと思ふからである。

李商隱、字義山、懷州河内人。宣宗の大中十二年888（文徳天安二年）、四六歳卒。清少納言枕草子の成立は長保三年1001——（初稿本成立・田中重大郎博士説）——であるから、義山雜纂の成立後、約百四十余年 ということになる。

(一)自然美形成と典據

中国の作家が、その制作にあたって、故事・古典を引用するのは、常套手段であるが、中でも李商隱は、『談苑』に
義山爲文多簡閱書冊左右鱗次號獮祭魚
と云うように、その援引が甚だしい。

白氏文集に心酔した皇后定子サロンの、代表的メンバーである清少納言もまた、その文芸的活動において、中國の故事・古典を巧みに引用して令名を馳せた作家である。

枕草子の自然美形成については、拙著『枕草子論』26頁第四章枕草子の文芸様式そのⅢ美論（自然美）——項新しい自然美 二項自然美——動きの美 三項とりあわせの美 四項感覚の総動員による美形成 五項繊細——で詳述した。清少納言の自然への関心の深さは、自然美の発見となつて枕草子の諸章段をなしている。物づくしの章段だけでも、順次にあげれば（校訂上氏三卷本枕草子ニヨル）山は市は 峯は 原は 淵は 海は みささきは わたりは 木の花は池は 花の木ならぬは 鳥は 虫は 馬は 牛は 猫は 滝は 河は 橋は 里は 草は 草の花は、関は 森は 原は 井は 野は 風は 鳥は 浜は 浦は 森は 岡は 降るものは 日は 月は 星は 雲は 崎は 貝は 等。花は、草の花と木の花とを別々に論じ、木は、花を賞せぬ樹木と、花の木とを区別する程、入念である。「木の花」の項では、紅梅、櫻、藤、橘、梨の花、桐の花、棟の花。「花の木ならぬは」にあげる木は、楓、桂、五葉、たそばの木、

サロンの文芸活動つづき—李義山雜纂・義山詩集と枕草子・清少納言集—

檀、寄生木、榊、楠、檜、あすはひの木、ねずもちの木、棟の木、山橘、山梨、椎、白樫、ゆづり葉、柏木、櫻櫨の木。『虫は』鈴虫、ひぐらし、蝶、松虫、きりぎりす、はたおり、われから、ひを虫、螢、蓑虫、夏虫、蛾。『鳥』は、鸚鵡、郭公、水鶏、鴨、都鳥、鶺鴒、ひたき、山鳥、鶴、斑鳩、たくみ鳥、頭赤き雀、鷺、千鳥、鴛鴦、鶯。『草の花は』、なでしこ、女郎花、桔梗、朝顔、刈萱、菊、壺蕪、竜胆、かまつかの花、かにひの花、萩、八重山吹、夕顔、しもつけの花、葎の花、薄。『草は』菖蒲、菰、葵、沢瀉、三稜草、蛇床子、苔、雪間の若草、こだに、酢漿、あやふ草、ことなし草、忍草、道芝、茅花、蓬、山菅、日かげ、山藍、浜木綿、葛、笹、青つづら、薺、苗、淺茅、蓮葉。…花は佛に…花なきころ、緑なる池の水に紅に咲きたるもいとをかし、唐葵、さしも草、八重葎、つきくさ。という風に各項下におけるそれぞれについて、②のように、その美を讚える場合と、『鳥は』の項下の「鶴はいとこちたきさまなれど鳴く声雲居まで聞ゆるいとめでたし」と、詩經小雅「鶴鳴九臯声聞于天」を援引して讚美する場合とがある。

義山雜纂には、自然美の項目はない。義山詩集では、流石に自然の風物を題とするものが多い。順次あげてみれば、
 蟬 柳 巴江柳 石榴 憶梅 贈柳 諸柳 北禽 柳 風雨 槿花
二首 蝶 風 春日 蝶 三首 落花 月 垂柳 曲池 李花 柳
 蜂、雨、菊、牡丹 蝶 牡丹 櫻桃 二首 題鶯 春風 蜀桐 荷花
 杏花 柳 野菊 關門柳 春雨 鴛鴦 風 洞庭魚 龍池 流鶯
 殘花 細雨 海上 贈荷花 小桃園 嘲櫻桃 風 櫻桃花下 槿花
 細雨 江上 韋蟾 蝶 滯雨 月 夜冷 微雨 詠雲 柳 僧院杜

丹 嘲桃 題小松 喜雪 柳枝 五首 朱槿花 二首 木蘭 垂柳 木蘭
 花 金燈花

中国の詩人らしく柳が十五回と圧倒的に多く、異常に関心をよせるが、枕草子の物づくしには採りあげない。両者共通のものには○印を附した。花について、両者の相違を示す一例をあげよう。

槿花 李義山詩集

風露凄凄秋景繁 可憐榮落在朝昏 未央宮裏三千女 但保紅顏莫保
 恩

橘の花 枕草子「木の花は」

四月のつごもり、五月のついでたちの頃ほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるささまにをかし。花のなかり黄金の玉かと見えていみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたる朝ほらけの櫻におとらず。郭公のよすがとさへ思へばにや、なほさらにいっへうもあらず。前者の古典援引による抽象的理念的形成に対し、後者は花自体を緻密に観察し、写実的具象的美観を形成する。次に共通の「対象」ということで、風を観よう。

雜纂に「風」と題する章段はない。義山詩集には風と題するものには(以下)「清・朱鶴齡箋注程夢星冊補局印行李義山詩集箋注」二ヨル)次の詩がある。

①風

廻拂來鴻急 斜催別燕高 已寒休慘淡 更遠尚呼號 楚色分窗塞
 夷音接下牢 歸舟天外有 一爲戒波濤

②風

撩玳盤孔雀 惱帶拂鴛鴦 羅薦誰教近 齋時鎖洞芳

③春風

春風雖自好 春物太昌昌 若教春有意 惟遣一枝芳 我意殊春意

先春已斷腸

④風雨

淒涼寶劍篇 羈泊欲窮年 黃葉仍風雨 青樓自管絃 新知遭薄俗

舊好隔良緣 心斷新豐酒 銷愁斗幾千

右の詩は、朱鶴齡の箋注、程夢星の補注をもつ。

①〔沈約詠風〕送歸鴻於碣石 〔庚肩吾風詩〕湘川燕起餘〔荊州記〕

那西泝江六十里南岸有山名荆門北岸有山名虎牙二山楚西塞 〔何遜

集〕有入西塞示南府同僚詩 〔元和郡國志〕下牢鎮在夷陵縣西二十

八里…… 星按此亦寓言前四語喻排擠之徒後四語述風波之險過西塞

山與下牢鎮蓋亦宣宗大中三年桂嶺府罷北歸道中之作也

②④〔炙輶子〕漢武帝時諸仙女從王母下降皆貴鳳首玳孔雀搔頭 ④

〔徐彥伯詩〕贈君鴛鴦帶因以鸚鵡裘 〔漢武內傳〕帝以紫羅薦地燔百

和之香以待王母 ④〔楚詞〕娉容修態絕洞房些 ④〔長門賦〕徂清夜於

洞房星按此亦刺女冠之流也

③注ナシ

④〔唐書〕武后索郭元振所爲文章上寶劍篇 ④〔盧思道書〕羈泊水鄉

無乃動悴 ④〔曹植美女篇〕青樓臨大路高門結重關 ④〔漢書元帝紀〕

壬人在位吉士壅蔽重以周秦之弊民漸薄俗 〔王維詩〕新豐美酒斗十千

風の詩を詠むに際して、①は先ず、沈約の風の詩から「鴻」を、

庚肩吾の風の詩から「燕」を引用してよみはじめる。程夢星の義山

年譜によると、大中三年、桂州より入朝北歸道中の作とする。程夢

サロンの文芸活動つづき―李義山雜纂・義山詩集と枕草子・清少納言集―

星が推察するように、前四語が排擠之徒を寓するものとすれば、眼前の実景はより陰慘となり、結句の戒波濤は、来るべき大風を恐れる心情を表白する。②は、一層顕著に古典を引用する。むしろ、古典の美辞をつづつて一首を成した観さへある。③は珍しく引用のない詩であるが、甚だ抽象的である。④は、箋注にいうように、先人の詩を引用し、これをちりばめて不遇をうたう。郭震が寶劍篇を奉つて武后に嘉歎されて引きたてられたように、弱冠にして文才をもつて令孤楚の巻願をうけた事から詠じ出し、王茂元の女婿となつたため、令孤楚、その子綯にうとまれ綯が宰相となるに及んで世に出る途は絶えた、その凋落の身を、風雨にさらされる鬪目の黄葉にシンボライズする。どうも、何れも風そのものを詠じた詩とはいえない。

枕草子 風はの章段をあげよう。

風は風。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる雨風。八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨の脚横さまにさわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣のかかりたるを、生絹の單衣かさねて着たるもいとをかし。この生絹だに、いと所せく暑かはしく、取り捨てまほしかりしに、いつのほどにかくなりぬるにかと思ふもをかし。暁に格かかし子・妻戸つまどをおしあげたれば、嵐のさと顔にしみたるこそいみじくをかしけれ。九月晦なかつきごもり日・十月のころ、空うち曇りて風のいとさわがしく吹きて、黄なる葉どものほろほろとこぼれ落つるいとあはれなり。桜の葉、棕の葉こそいとくは落つれ。十月ばかりに木立おほかる所の庭はいとめでたし。野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。立部たじぶ・透垣すゐが

などの乱れたるに、前裁ぜんさいどもいと心苦しげなり。大きな木ども倒れ、枝など吹き折られたるが、萩・女郎花などの上によころばひ臥せる、いと思はずなり。格子の壺などに、木の葉をことさらにしたらんやうに、こまごまと吹き入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとは覚えぬ。

いと濃き衣のうはぐもりたるに、黄巧葉の織物・薄物などの小桂着てまことしう清げなる人の、夜は風のさわぎに寝られざりければ、久しう寝起きたるまに、母屋よりすこしぬざり出でたる、髪は風に吹きまよはされて、すこしうちふくだみたるが、肩にかかれるほどまことにめでたし。ものあはれなるけしきに見出して、「むべ山風を」など言ひたるも心あらんと見ゆるに、十七八ばかりにやあらん、小さうはあらねど、わざと大人とは見えぬが、生絹なまぬいの単衣たんいのみじうほころび絶え、はなもかへりぬれなどしたる薄色の宿直物をきて、髪、色に、こまごまとうるはしう、末も尾花のやうにて、丈ぢばかりなりければ、衣の裾にかくれて、袴はかまのそばより見ゆるに、童わらわ、若き人々の、根ねこめに吹き折れたる、ここかしこに取り集め、起し立てなどするを、うらやましげにおしはりて、簾すだれに添ひたるうしろでもをかし

風的美をあげるのに、まず第一に、「風」。次に晩春の夕の雨風、秋の雨風、颯風さつふうの日の人々の姿態すがたの美しさ。殊に、暁に格子や妻戸をあけた途端に、顔にしみる風の感觸、格子の小間に木の葉を吹き入れた風のしわざにはほえむ、風の翌朝、野分に荒れた庭を見やる人々の所作、姿態、など、見事な「風的美」形成である。ここで、清少納言は、彼女の精緻な自然觀察を、簡潔鮮明な表現で形成するのに

熱中して、煩瑣はんさな古典の引用など一切しない。ただ、彼女が創造する景中の人物が自然に口ずさむ「むべ山風を嵐といふらん」のみ。（これは当時の教養人にとって極めて自然の口ずさみであつて、意識して古典を引用する、というていものではない。義山集の場合には、先ず、古典を挙げる、多くの場合、我身の不遇をかこつ寓意、等が先行する。前掲、花についてあげた一例、榎花と橘の花の場合にもいえることで、両者の全くことなるところである。

清少納言集には純然たる自然美觀照、形成がない。殆ど、恋愛、社交上の贈答歌群である。義山の場合と面白い対照である。

(二) 不快感系列の素材

義山雜纂——叢書集成本を底本とし、イ本唐代叢書本、口本説郭本、ハ本古今説海本、二本静嘉堂文庫本、ホ本内閣文庫本（写本）、へ本内閣文庫本（刊本）、ト本五朝小説本で校異した拙著「改訂義山雜纂注釈を使う。筆者は本書を四十二の章段に分けた。——には、四十二の章段中、次のものは、不快感系列に属する素材を対象としている。枕草子でも、めでたきもの、心ゆくもの、うつくしきもの等々の、快感系列に属する素材を対象とする章段の外に、にくきもの、すさまじきもの等々の章段がある。これを比較対照して先ず全体を概観する。

義山雜纂

- 一 必不來 (二) 不相称 (三) 差不出 (四) 怕人知 五 不嫌
- (六) 遲滞 (七) 不得已 八 相似 九 不如不解 十 惡不久 (十一)
- (十二) 惱人 十二 失本体 十三 隔壁聞語 十四 富貴相 (十五) 謾人語
- (十六) 酸寒 (十七) 不快意 (十八) 惶愧 (十九) 殺風景 (二十) 不

忍聞 (二二) 虚度 (二二) 不可過 (二三) 難容 (二四) 意想 (二二)
 五) 悪模様 (二六) 不達時宜 (二七) 悶損人 (二八) 癡頑 (二九)
 愚昧 (三〇) 時人漸顛狂 (三一) 非礼 (三二) 枉屈 (三三) 不祥
 三四 須貧 三五 必富 三六 有知能 三七 教子 三八 教女 三九 矢去
 就 (四〇) 強会 四一 無見識 四二 要小下便宜
 (一) 印不快感系列 25-42 (47) 強

*印 快感系列 1-42

▲印 教訓・教誡 16-42

枕草子

(三二) すさまじきもの (二二) たゆまるるもの (三三) 人にあなづ
 らるるもの (二四) にくきもの 二四* 心ときめきするもの 二六* 過
 ぎにしかた恋しきもの 二七* 心ゆくもの 二六* あてなるもの (四
 一) にげなきもの (六五) おぼつかなきもの 六六* としへなきもの
 六九* ありがたきもの (七二) あぢきなきもの 七三* 心地よげなるもの
 の 七八* もののあはれしらせ顔なるもの 八一* めでたきもの 八二*
 なまめかしきもの (八七) ねたき物 (八八) かたはらいたきもの
 (八九) あさましきもの (九〇) 口をしきもの 九九* はるかなるもの
 (二〇) 見苦しきもの 一〇二 言ひにくきもの 一十七 常よりこと
 にこきゆるもの 一〇八 絵にかき劣りするもの 一〇九 かきまさり
 するもの 一一一 あはれなるもの (一一三) いみじう心づきなきもの
 の (一二四) わびしげに見ゆるもの (一二五) 暑げなるもの (一一
 六) 恥づかしきもの (一二七) むとくなるもの (一二九) はしたな
 きもの (一二〇) つれづれなるもの 一三一* つれづれ慰むもの
 (一三二) とりどころなきもの (一三八) おそろしげなるもの 一三三

サロンの文芸活動つづき—李義山雜纂・義山詩集と枕草子・清少納言集—

九清しと見ゆるもの (二四〇) いやしげなるもの (二四二) 胸つぶ

るるもの 一四二* うつくしきもの 一四三人はへするもの (一四
 四) 名おそろしきもの 一六五 見るにことなることなきもの 文字に
 書きてことごとしきもの (一四六) むつかしげなるもの (一四九)
 苦しげなるもの 一四九* うらやましげなるもの 吾とくゆかしきも
 の (一五二) 心もとなきもの (一五三) 昔おぼえて不用なるもの
 (一五四) たのもしげなきもの 一五六 近うて遠きもの 一五七 遠く
 て近きもの 一七五 したり顔なるもの 一八六 心にききもの 二一
 * 大きにてよきもの 二二四 短くてありぬべきもの 二二五* 人の家
 につぎつきしきもの (二三四) さわがしきもの (三三九) ながし
 ろなるもの (三三六) ことばなめげなるもの (三三七) さかしきもの
 二三六 ただに過ぎに過ぐるもの 二三九 ことに人に知られぬもの
 (二四二) いみじうきたなきもの (二四二) せめておそろしきもの
 二四三 たのしきもの 二五四* うれしきもの 二七二* きらきらしきも
 の 二八一 見ならひするもの (二八二) うちとくまじきもの

*印快感系列 21段 296段

(一) 印不快感系列 35段 296段

▲印教訓教誡 ○

李義山雜纂

第二不相称

窮波斯。病醫人。不
 解飲弟子。瘦人相撲。
 肥大新婦。先生不識

枕草子

四一 にげなきもの

下衆の家に雪の降りたる。また月のさし入
 りたるも口をし。月の明かきに屋形なき車
 のあひたる。また、さる車にあめ牛かけた

字。屠家念經。社長
乘涼轎。老翁入娼家。

○ふにあひなものと

右白加田貧しいベル
訳以下同

シヤ人。病氣の醫者。

下戸の弟子。ヤセぎ

すが相撲とる。ふと

つた花嫁。先生が文

字をしらぬの。屠殺

やの念佛。社長があ

げごしにのる。ぢい

さんが女郎屋にあが

るの。

第二十六不達時宜

下賤人前談經史。向

娼婦吟詩。認他高貴

為親。將主人酒食作

人情。賤イロハ残食還主

人。將男女赴席。誇

男女伎倆。獎男女嬌

駭。筵上包彈品味。

強學時樣妝束。食後

不起妨主人。問主人

魚肉餽。与寡婦認親

る。また老いたる女の腹高くてありく。若
き男もちたるだに見苦しきに、こと人のも
とへいきたるとて腹立つよ。老いたる男の
寝まどひたる。またさやうに鬚がちなる者
の椎つみたる。菌もなき女の梅食ひて酸が
りたる。下衆の紅の袴着たる。靱負の佐の
夜行姿・狩衣姿もいとあやしげなり。人に
怖ぢらるる袍はおどろおどろし。立ちさま
よふも見つけてあなづらはし。「嫌疑の者
やある」とがむ。入りぬてそらだきもの
にしみたる几帳にうちかけたる袴などいみ
じうたつきなし。かたちよき君だちの弾正
の弼にておはする、いと見苦しし：

往来。喫他飲食不謙
讓。借他物令自來取。

入人房闖取人物看。

得人恩不思報。向人

花園採果。窮漢說大

話。家貧学富人。作

客自呼賓。暑月排筵

久坐

○折にあわぬもの

卑しい者の前で經史

を語るの。娼妓に

向つて詩を吟じる。

身分のいい人とみて

親類顔する。主人の

もので人に贈物（馳

走）をする。食べの

こりを主人にかえ

す。息子・娘をつれ

て会に出るの。息

子・娘の腕前をほこ

るの。息子・娘の愚

かしいのを自慢す

る。宴席の御馳走に

けちをつける。むり

に流行をまねるの。食後いつまでも坐を立たずに主人側の邪魔になる。馳走になる客が主人に魚肉の値段をたづねるの。未亡人と親戚と称して往来する。他人に飲食物の馳走になりながら遠慮会釈がない。他人のものを借りて返さず貸し主にとりに来させる。他人の部屋にずかずか入って他人の物を手に取って見る。人の恩をうけても恩返ししようと思わない。人の花園には入って実をとるの。素寒貧が大きな話をする。家が貧しくせに金持のまね。客にいつて自分を賓客よばわ

りする。暑い時分、筵に長時間坐っているの。

第十六 酸寒サドク

山縣移市。村縣待賓。騾馬鳴村中。村漢呼雞。村漢著新衣。牛背吹笛。乞兒驅雞。散樂打單枝鼓。

○わびしいもの

山里にたつ市。田舎でお先拂い。田舎の県で賓客を招じる。騾馬が村中でなく。百姓が雞をよぶ声。農夫が仕立おろしを着てるの。牛の背で笛を吹く。乞食の鬼やらい。散樂で単枝鼓をならすの。

第十七 不快意

鈍刀切物。破帆使風。樹陰遮景致。築牆遮山。花時無酒。暑月

一一四わびしげに見ゆるもの

六七月の午・未の時ばかりに、きたなげなる車にえせ牛かけてゆるがし行く者。雨降らぬ日、張り筵したる車。いと寒きをり、暑きほどなどに、下衆女のなりあしきが子負ひたる。老いたる乞食。ちひさき板屋の黒うきたなげなるが、雨にぬれたる。また雨いたうふりたるに、小さき馬に乗りて御前したる人。冬はされどよし。夏は袍も下襲もひとつにあひたり。

一一五暑げなるもの

隨身の長の狩衣。納の袈裟。出居の少将。いみじう肥えたる人の髪おほかる。六七月の修法の日中の時おこなふ阿闍梨。

背風排筵

○あじきないもの
なまくらで物をきる。破れ帆に風。眺望を駄目にする木かげ。牆をついたために山が見えなくなつたの。花時に酒がない。暑中に風の通さぬところに筵をし

第二十一虚度

花時多病。好時節福迫。閹宦娶美婦。貧家節日。好家業不和。貧家好花樹。好景不吟。好廳館不作會。
○折角なのに口惜しいこと。
花時の病がち。好い時候に手づまり。宦官が美人の妻をもつ。貧家の節句。良家に家業が左前。貧

〇七一あぢきなきもの

わざと思ひたちて宮仕に出で立ちたる人の物うがり、うるさげに思ひたる。とり子の顔にくげなる。しぶしぶに思ひたる人を強ひて婚にとりて、思ふさまならずとなげく。

九〇口をしきもの

五節・御佛名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる。節会などに、さるべき御物忌のあたりたる。いとなみいつしかとまつ事の、さはりあり、にはかにとまりぬる。あそびをもし、見すべきことありて、呼びにやりたる人の来ぬ、いと口をし。
男も女も法師も、宮仕所などより同じやうなる人もろとも寺へも詣で、物へも行くに、このまじうこぼれいで用意よくいはばけしからず、あまり見苦しとも見つべくぞあるに、さるべき人の馬にても車にても行きあひ、見ずなりぬるいと口をし。わびて

乏家にみごとな花樹。いい景色をみて吟じない。堂々たる建築の役所で会をしないの

〇第二十五悪模様

作客与・人相争鬪。
打毬墜馬。対大僚食咽。僧尼新還俗。筵上乱叫喚。撓奪人話柄。著鞋臥人床。未語先笑。作客踏翻臺卓。对丈人丈母唱豔曲。嚼残魚肉置盤上。横箸在羹椀上。
○見苦しいさま
お客になつて人と喧嘩をはじめたの。毬を打つ拍子に馬から落ちた。高官の前で食事中むせる。僧尼が又娑婆に還俗したの。宴席で大声あげてあはれまわる。

は、すきずきしき下衆などの人などにかたりつべからんをがなと思ふも、いとけしからず。

二四にくきもの

急ぐことあるをりにきて長言するまらうど。あなづりやすき人ならば、「後に」とてもやりつべけれど、さすがに心恥づかしき人、いとにくくむつかし。硯に髪の入りにすられたる。また、墨の中に石のきしきしときしみ鳴りたる。にはかにわづらふ人のあるに験者もとむるに例ある所になく外に尋ねありくほど待ち遠に久しきに、からうじて待ちつけて、よろこびながら加持せきするに、このごる物の怪にあづかりて困じにけるにや、あるままにすなはちねぶり声なる、いとにくし。なでふ事なき人の笑がちにて物いたういひたる。火桶の火・炭櫃などに、手の裏うち返しうち返し、おしのべなどしてあぶりをる者。いつか若やかなる人などさはしたりし。老いはみたる者こそ、火桶の端に足をさへもたけて、物言ふままにおしすりなどはすらめ。さやうの

人の話を脇から奪いとる。くつをはいたまま他人のベッドに横たわる。まだ話し出しませぬ中に笑うの。お客になっていつて、テーブルを踏んでひっくりかえす。妻の父母の前でつやつぱい歌をうたう。魚肉のたべのこりをテーブルの上からかすの。汁椀の上に箸を横たえるの。

第十一惱人

遇佳味、脾家不和。終夜歎飲酒、饒卻空。方謁上官忽背癢。賭博方勝油盡難尋。淘井漢急尿尿。遺不去無頼窮親。○人の気を揉まずもの

者は、人のもとに来て、あんとする所をまづ扇してこなたかなたあふぎちらして、塵はきすて、居も定まらずひろめきて、狩衣の前まき入れてゐるべし。かか事はいふかひなき者の際にやと思へど、すこしよろしき者の式部の大夫などいひしがせしなり。また、酒飲みてあめき、口をさぐり、鬚ある者はそれをなで、盃こと人に取らするほどのけしき、いみじうにくしと見ゆ。また飲めといふなるべし。身ぶるひをし、頭ふり、口わきをさへひきたれて、童の「こふ殿にまゐりて」などうたふやうにする。それはしも、まことによき人のしたまひしを見しかば心づきなしと思ふなり。

ものうらやみし、身の上歎き、人の上いひ、つゆ塵の事もゆかしがり、聞かまほしうして、言ひしらせぬをば怨じそしり、またわづかに聞かえたることをば、われもとより知りたる事のやうにこと人にも語りしらぶるもいとにくし。物聞かんと思ふほどに泣くちご。鳥のあつまりて飛びちがひ、さめき鳴きたる。忍びてくる人見しりてほゆる犬。あながちなる所に隠しふせたる人のい

御馳走に出会わしたのにお腹の具合がわるい。夜つびで酒もりして楽しんでる時、酒樽が空になる。上役に御目にかかつていざ御辞儀という折、背中が急にむづかゆくつてやりきれぬ。ぱくちを打つて、今一息で見事勝とうとしている時、燈火の油がきれて真暗になり場が見えぬ。井戸さらえの男が仕事の中、急に厠に行きたくなつた。逐つぱらつても帰つてくれぬ貧乏なごろつきの親戚。

びきたる。また、忍び来る所に、長鳥帽子して、さすがに人に見えじとまどひ入るほどに、物につきさはりてそよるといはせたる。……
ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそ声にわびしげに名のりて、顔のほどに飛びありく、羽風さへその身のほどにあるこそいとにくけれ。きしめく車にのりてありく者、耳もきかぬにやあらんといとにくし。わが乗りたるは、その車の主さへにくし。また、物語するに、さし出でてわれひとりさいまくる者。すべてさしいでは童も大人もいとにくし。あからさまにきたる子ども、童を見入れらうたがりて、をかききもの取らせなどするに、ならひてつねに来つづ入りて、調度うち散らしぬるいとにくし。家にて、宮仕所にて、あはでありなると思ふ人の来たるに、そら寝をしたるを、わがもとにある者、起しにより来て、いぎたなしと思ひ顔にひきゆるがしたる。いとにくし。いままゐりのさしこえて、物知り顔に教へやうなることいひ、うしろみたる、いとにくし。……
蚤もいとにくし。衣の下にをどりありきて、

第二十三難容

僧道対風塵笑語。僕人学措大體段。卑幼傲尊長。僕妾挽言語。武人村夫学書語。

○ゆるせぬもの
僧侶が芸者と笑いはなし。下男が書生の様子をまねる。年少の者が目上に傲慢なの。下男や妾が口出する。軍人や百姓の漢語づかい。

第二十二不可過

夏月肥漢。入舎妻悪。遭貪酷上官。悪俗同僚。大暑渉長途。対

もたぐるやうにする。犬のもろ声にながながとなきあげたる。まがまがしくさへにくし。あけて出で入る所、閉てぬ人いにくし。

一〇一見苦しきもの

衣の背逢ひかたによせて着たる。またのけくびしたる。例ならぬ人の前に子負ひて出で来る者。法師・陰陽師の紙冠りして蔽へしたる。色黒うにくげなる女のかづらしたると、鬚がちにかじけやせたる男と、夏、昼寝したるこそいと見苦しけれ。なにの見るかひにてさて臥いたるならん。……またみなおしなべてさる事となりたれば、われにくげなりとて起きあるべきにもあらずかし。……夏、昼ねして起きたるは、よき人こそいますこしをかしけれ。えせかたちはつやめき瘦腫れてようせずは、頬ゆがみもしぬべし。かたみにうちみかはしたらんほどの生けるかひなさや。やせ色黒き人の生絹の単衣きたる、いと見苦し。二一すさまじきもの
昼ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅の衣。牛死にたる牛飼。ちご亡くなりたる産屋。火おこさぬ炭櫃地火炉。博士のうちつづき

蟲人久坐。舟中雨漏。茅屋不穢濕。守令好尋事。

○やりきれないもの

夏の間の肥りじし。家に帰れば悪妻。貪酷な上役に仕えるはめになる。柄のわるい同僚。炎暑に長道中。粗野な人と長く対坐するの。舟の中の雨もり。茅屋の中が汚くじめじめしている。長官の詮索好き。

第三十一非礼

呼児孫表徳。母在呼舅作渭陽。対父母呼妻弟。聽妻話怪尊長。祭亡人卻動樂。徑入他人房闖。

○無礼なもの

自分の子や孫の事をほめたてる。母があ

女子生ませたる。方違へに行きたるに、あるじせぬ所。まいて節分などはいとすさまじ。

人の国よりおこせたる文の物なき。京のももさこそ思ふらめ。されど、それはゆかしき事どもをも書き集め、世にある事なども聞けばいとよし。人のもとにわざと清げに書いてやりつる文の返りごと、いまはもて来ぬらんかし。あやしうおそきと待つほどに、ありつる文、立文をも結びたるも、いときたなげにとりなしふくだめて、上に引きたりつる墨など消えて、「おはしまさざりけり」。もしは「御物忌とて取り入れず」といひて、もて帰りたる、いとわびしくすさまじ。また、かならず来べき人のもとに、車をやりて待つに来る音すれば、さななりと人々出でて見るに、車宿りにさらに引き入れて、轆ほうとうちおろすを、「いかにぞ」と問へば、「今日は外へおはしますとて、わたりたまはず」などうちいひて、牛のかざり引き出でて往ぬる。また家の内なる男君の来ずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮仕するがりやりて恥づかしと思ひゐたるも、いとあいなし。乳児の乳母の、

るのに伯叔父(母方の)事を渭陽というの。父母の前で妻の弟を呼ぶ。妻の口ばかり信じて目上の人を疑う。亡くなった人を祭りながら遊び半分。他人の部屋にずかずか入るの。

第十九殺風景

花間喝道。看花淚下。苔上鋪席。斫卻垂楊。花下曬棍。游春重載。石筍繫馬。月下把火。妓筵說俗事。果園種菜。背山起樓。花架下養雞鴨。
三山老人語錄
対花啜茶。煮鶴燒琴。○風情をこわすもの花の下でのお先払い。花をみて泣く。苔の上に席をしくの。しだれ柳を切りすてる。花の下に種

ただあからさまにとて、出でぬるほど、とかく慰めて、「とく来」と言ひやりたるに、「今宵はえまゐるまじ」とて返しおこせたるは、すさまじきのみならず、いとにくくわりなし。女迎ふる男、まいていかならん。待つ人ある所に、夜すこしおけて、忍びやかに門たたけば、胸すこしつぶれて、人出だして問はするに、あらぬよしなき者の、名のりして来たるも、かへすがへすすまじといふはおろかなり。

験者の物の怪調ずとて、いみじうしたり顔に独鈷や数珠など持たせ、蟬の声しほり出だして読みぬたれど、いささかさりげもなく、護法もつかねば、あつまり念じたるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまで読み困じて、「さらにつかず、立ちね」とて、数珠取り返して、「あな、いと験なしや」とうちいひて、額よりかみさまにさくりあげ、あくびおのれうちして、よりふしぬる。いみじうねぶたしと思ふに、いとしも覚えぬ人の、おしおこして、せめてものいふこそいみじうすさまじけれ。除目に司得ぬ人の家。今年はかならずと聞きて、はやうありし者どものほかほかなり

をほすの。行楽の春に重い荷物。石筍に馬を繫ぐ。月下に燈火をともす。芸者をあげて遊ぶ席で金儲けばなし。果樹園に野菜を作る。山を後に高樓をたてる。花の下に鶏や鴨を飼うの。

第二十七悶捐人

請貴客不来。悪客不請自来。被醉人纏住不放。物賤無錢買。出門逢債主。与讐家对坐。大暑逢悪客。美妾妬妻。○人の氣をいらいらさせるもの高貴の人を招待して来てくれぬ。迷惑な客は招きもしないのに自分から来る。酔っぱらいにまとい

つる、田舎だちたる所に住む者どもなど、みなあつまり来て、出で入る車の轆も隙なく見え、物語でする供に、われもわれもとまゐりつかうまつり物食ひ、酒のみ、ののしりあへるに、はつる暁まで、門たたく音もせず、あやしうなど、耳立てて聞けば、前駆おふ声々などして上達部などみな出でたまひぬ。もの聞きに宵より寒がりわななきをりける下衆男、いともものうげにあゆみ来るを、見る者どもは、え問ひだに問はず、外より来たる者などぞ、「殿はなに、かならせたまひたる」など問ふに、いらへには「なにの前司にこそは」などぞいらふる。まことにたのみける者は、いとなげかしと思へり。つとめてになりて、ひまなく居りつる者ども、一人二人すべり出でて往ぬ。古き者どもの、さもえ行きはなるまじきは、来年の國々、手をりてうちかぞへなどしてゆるぎありきたるも、いとほしうすまじげなり。よろしうよみたると思ふ歌を、人のもとにやりたるに、返しせぬ。……

つかれて離れられぬ。安い品物があるのに買う金がない。家を出た拍子に借金取りに会う。嫌いな奴と対坐。猛暑に嫌な客。美人の妾が本妾を妬くの。

第七不得已

忍病飲酒。大暑赴會。掩意打兒女。流汗行札。忍痛灼艾。為妻罵愛寵。冒暑迎謁。老乞休致。窮寺院待客。

○やむをえないこと病氣をおして酒を飲む。暑いさかりに会合に出る。感情をこらして可愛い子をぶつ。汗だけで礼儀をする。痛いのを我慢して灸をすえる。妻に気兼ねしておも

八七ねたきもの

人のもとにこれよりやるも、人の返事も、書きてやりつる後、文字一つ二つ思ひなほしたる。とみの物縫ふに、かしこう縫ひつと思ふに、針を引き抜きつれば、はやく尻を結ばざりけり。又かへさまにぬひたるもねたし……おもしろき萩・薄などを植えて見るほどに、長櫃もたる者、鋤などひきさげて、ただ掘りに掘りて往ぬるこそわびしうねたけれ。よろしき人などのある時はさもせぬものをいみじう制すれど、「ただすこし」などうち言ひて往ぬる、いふかひなくなたし。……

いものを叱る。暑さを堪えて客迎え。年とつて退官を願う。貧乏寺のお客事。

第二十不忍聞

狐館猿啼。市井穢語。旅店秋砧声。少婦哭夫。老人哭子。落第後喜鵲。乞兒夜号。居喪聞樂声。纒及第便卒。

○さくに堪えないもの
淋しいはたごで猿の啼く。町のがやがや話。秋のはたごで聞く砧の音。若い妻が夫を亡くして泣くの。老人が子に先立たれて泣く。試験におちたのにめでたい鵲の声。乞食が夜なしくの。喪中にきく楽しいげな音楽。やつと

(一一一あはれなるもの)

孝ある人の子。よき男の若きが御嶽清げなるがいと黒き衣着たるこそあはれなれ。九月晦日、十月一日のほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの声。鶏の子いだきて伏したる。秋深き庭の浅茅に露のいろいろの玉のやうに置きたる。夕暮・暁に川竹の風に吹かれたる、目さまし聞きたる。また夜などもすべて。山里の雪。思ひかはしたる若き人のなかのせくかたありて心にもまかせぬ。

試験に合格したのに
はっきり死んだ話。

第十八惶愧

犯人忌諱。遇見讐家。
欠債不償逢主。参謁
失礼。醒後聞醉語。

○あわててどうしよ
うとおもうもの

その人に言つてはな
らぬ事を言つた折。
ひよっこりかたき
に出会う。借金を返済
せぬ中に金主に出会
す。高貴の前に出て
無礼をしでかした
の。酔がさめて後、
よっぱらつて口にし
た事を人にいわれ
る。

枕草子は、「春は曙……雨などふるもをかし……」「比は……をかし」「山は……をかしけれ」というように、「をかし」と明示しなくとも、「をかし」と思うもの、事象を列挙する立場である。それが、「いみじうきたなきもの」「にくきもの」などと、およそ、をかしの対象とはなりにくい、その反対の、醜悪、不快、腹立たしい等々、

サロンの文芸活動つづき——李義山雜纂・義山詩集と枕草子・清少納言集——

一四一 胸つぶるるもの

競馬みる。元結よる。親などの心地あし
とて例ならぬけしきなる。……物言はぬ乳
児のなき入りて、乳ものまず、乳母の抱く
にもやまで久しき。例の所ならぬ所にて、
ことにまたいちじるからぬ人の声聞きつけ
たるはことわり、こと人などのそのうへな
ど言ふにもまづこそつぶるれ。いみじうに
くき人の来たるにも、またつぶる。あやし
くつぶれがちなるものは胸こそあれ。昨夜
来はじめたる人の、今朝の文のおそきは、
人のためにさへつぶる。
二四二 せめておそろしきもの
夜鳴る神。近き隣に盗人の入りたる。……
近き火、またおそろし。

筆者が、かりに名づけていう、「不快感系列」の素材をもつてくる。それは何故か。『枕草子論』で、既に述べたように、清少納言は、人間に、人間のいとなみ、心のうごき、人間社会に、彼女が自然界に注いだと同じように深い関心と愛情とをもっている。愛すべき此の卑小なる人間存在の、一見、醜い、ぶざまさも、情なさも、清少納言の手にかかつて、枕草子の一段となると、それらは、全く、不快ではなく、むしろ、一味違った風あいの快感、面白味をすら將來する、それを承知していたからである。

さて、「をかし」の文芸枕草子の中には、不快感系素材が、前掲（一）印、35—296約一割強 介在する。それ以外は、殆ど凡て、「をかし」と思う素材を扱うのであるが、その中でも特別に讚美したいものは、「めでたきもの」、「うつくしきもの」等、快感系列の22段がある。本来の、優美、繊細で精緻な美——（自然や人間の容姿、心の動き、行動の）——の中に、不快感系列の章段は、ユーモラスな、快よい風あい、ほろ苦く佻しい人の世の、しみじみとした味わいを加味している。枕草子一篇は実に複雑で深味のある人間の味、つまり人間美と自然美を綴る。

義山雜纂では、快感系列素材は1段のみ。不快感系列は25—42、つまり4—7をしめ、それは直ちに、前掲のように、我慢ならぬ人間のおぼざまな心性、行動を鋭く指摘し、指弾する。教誡しようとする。外にまた、教訓性の強い章段が16—42存在するのである。

枕草子では、人間のおぼざまさ、鼻もちならぬ横柄さも、採りあげられると、一味違つたおもしろさ、快感を將來する。美に変えてしまふ芸である。清少納言の人間に対する愛がそうさせる。義山雜纂

は人を許さぬ。醜悪として摘発し、指弾し、教誡する。ここに両者の根本的相違がある。(●s共通事項)

(三) 教訓性と人間批判

四四「君は人からよくおもわれたいか。そうであるなら君のよさを人に語ってはならない」

モンテーニュ 三八「自分のことをしゃべればきつと捐をする。自分に対する非難は必ずふえ称讃はへる」(パンセ上 パスカル 津田梅訳 新潮文庫37頁)

のように、十六世紀フランスのモラリスト達(モンテーニュ、パスカル、フォンテーヌ、ロシュフコオ)は、「特に人間性の諸傾向と諸習慣とを研究する作家」といわれるように、人間についての気の利いた探求が、随想録風に纏々語り出される。箴言集と訳出されるように、それらには、東洋の家訓類―「顔氏家訓」、ことに「子孫汝等」のために書き記した吉氏「私教類聚」や「十訓抄」―、家記類―「紀家集」、「善家秘記」―、雑纂類―「義山雜纂」以下諸雜纂―、更にはまた、枕草子の一面と、相通じるものが認められる。共に、人間存在というものに、限らない興味関心をもつて書かれたものであるからであろう。

モンテーニュの随想録は、殊に打聞風の興味ある故事にみちており、それを引用して批判するやり方は、屢々、枕草子にも見うけられる。たとえば、

○右衛門尉なりける者のえせなる男親を……

○蟻通明神、貫之が馬のわづらひけるに……

○円融院の御時……

○村上の先帝の御時に雪のいみじう降り……

と、過去の、或は現代の事件、事象に深い関心をもって、批判論評を試みる様式と、甚だ似ている。

モラリスト達の箴言集、義山雜纂の家訓的・教誡的志向に通じる枕草子の人間批判は、前掲、○にくきもの①「いつか若やかなる人などさはしたりし」②式部の大夫などいひしがせしなり③それはしもまことによき人のしたまひしを見しかば心つきなしと思ふなり④すべてさし出では童も大人もいとにくし⑤宮仕人などのもとに來などする男のそこにて物食ふこそいとわるけれ⑥○文の詞なめき人こそいとにくけれ⑦

のように、いみじう心づきなきもの、はしたなきもの、にくきもの、にげなきもの、と批判するが、それらは、あくまでも私的な好悪の感情として表出する。主観的立場をとるものの、普遍的真理乃至大方の協賛をえられるもの、との確信をもっているようである。これだけ悪口を書いておけば、読者に、そんな「心ばせけにくき人」は出ないであろう、との思惑がうかがえる。「恥しきもの」の條の「男は……さすがに人の上をもどき物をいとよくいふさまよ。ことにたのもしき人なき宮仕人などをかたらひて、ただならずなりぬるありさまを、きよくしらでなどもあるは」は、甚だ婉曲な、当代輕薄男子批判、非難である。結果として、「かくかくの行為・態度・心得は感心しませんえ」と皮肉まじりに教訓されるようなものである。

義山雜纂では、第三十七教子「習祖業。立言不回。知礼義廉恥。精修六芸。談对明敏。進退威儀。忠良恭儉。孝敬慈惠。博学廣覽。交遊賢者。……」第三十八教女「習女工。議論酒食。温良恭儉。修飾容儀。学書学算。小心軟語。閨房貞潔。不唱詞曲。聞事不傳。善

事尊長。」第四十一無見識。第十二失本体。第十五謾人語。第二十八癡頑。第二十九愚昧。第三十四須貧。第三十五必富。第三十六有知能。第三十九失去就。第四十二要小下便宜等、教訓性が強く、手さびしい。

さて、人間の常として、「かくかくしてはいけない」といういき方は、とかく反撥をおぼえさせる嫌いがある。第一、右の諸段は、一寸も面白くない。枕草子は、「私は………するのは嫌い。………は憎い。………は憎い」という態度。一―三いみじう心づきなきもの「祭・禊」など、すべての男のものみるに、ただ一人乗りて見るこそあれ。いかなる心にかあらん。やんごとならずとも、若き男などの、ゆかしがるをもひきませよがし。すぎ影にただ一人、ただよひて心ひとつにまはりあたらんよ。いかばかり心せばくけにくきならんとぞ覚ゆる………」読者は、思わず共感し、楽しくなる。そんなことはしなくなる。効果思うべしである。

モンテーニュ達モラリストの随想録には、人間そのものに、いかに深い関心をもつていたか、想像されるが、枕草子もつ美の追求の精神、ことに自然美の追求、自然への深い興味関心、したがって鋭利、緻密な観察は見当たらない。

義山雜纂は、詩人であるから、人間の容姿・心情・自然の美しさに関心があるはずで、『不快意』に、「樹陰遮景致 花時無酒」、『殺風景』に「花間喝道、看花淚下、苔上鋪席………」というものの、雜纂中、ただ一段「富貴相」で「駿馬嘶 蠟燭淚、栗子皮、荔枝殼、落花落、鶯鶯語……高樓上吹笛」と僅少な表現だけである。これも、美景として採りあげたものではなく、富貴相なのである。義山

サロンの文芸活動つづき―義山雜纂・義山詩集と枕草子・清少納言集―

詩集に花を詠じても

石榴

榴枝阿娜榴實繁^a 榴膜豔明榴子鮮^b 可羨瑤池碧桃樹^c 碧桃紅顏^d 一千年^e
石榴そのものを個性的に a b c d と叙しながら、e f 西王母の瑤池をもち出して来なければ気がすまぬ。清少納言ならば、「阿娜」ですまらず、どう美しいかを具体的に形成するところ。義山にあっては、自然への関心は、花を見て酒を酌み、月を仰いで吟じ、山河をみて詩を賦す、というていの、甚だ観念的領域を出ないものようである。花は美しく、月は皎々と照らすにきまつている、というのであろう。

雜纂は人間に執し、教訓的、教誡的にいく。枕草子は人間存在、自然を共に深く愛した故に、それを、それぞれの位相において、多種多彩の美として享受、形成したのである。

(四) 諧謔

諧謔―コミック、あるいはフモール―の存在、これもまた、枕草子、義山雜纂に、モラリスト達の気の利いた箴言集に、共通項である。

「サロンが十九世紀文学の特質を示すモラリスト達の作品を残したことは、忘れてならない重要な事である。中でも、ラ・ロシュフコーの『箴言集』はすぐれたもので、直接サロンの活動の成果としてあげられるには、作者個人の人生観や体験が余りにもかわりすぎているが、サブレ夫人のサロンの『箴言づくりの遊び』によって腕を磨いたのである。」(百田) (東西女流文芸サロン―中宮定子とランブイエ侯爵夫人―目加田、百田共著 笠間書院刊)

モラリストの場合が、そういわれるように、枕草子もまた、皇后定子サロンで磨かれたエスプリ、伎倆の成果である。定子サロンで生まれ育った作品であるが故に、定子サロンのもつ優雅、才気、品位と共に、社交場であるサロンならではの諧謔もそなわっている。フモールもコミックも、人間関係を、和やかにする潤滑油であるから、清少納言の相当きつい批判・悪洒落も、清少納言のエスプリと咄嗟の巧妙な語呂あわせというテクニクをないまぜにした諧謔で、ことにならずに済んでしまう。○大進生昌が家に……の條である。

「それは于定國が事にこそ待るめれ。古き進士などに侍らずは、うけたまはり知るべきにも侍らざりけり。たまたまこの道にまかり入りにければ、かうだにわかまへ知られ侍り」といふ。「その御道もかしこからざめり。筵道^Bしきたれど、みな落ち入りさわぎつるは」といへば、「雨の降り侍りつれば、さも侍りつらん。よしよし、また仰せられかくる事もぞ侍る。まかりたちなん」とて往ぬ。

生昌の学識も大したことはない、というのだから、中宮を我家に迎えた生昌は激怒すべきところ。といわれて、ハテ通路のことかな？と血のめぐりの悪い生昌は、一瞬とまどい、怒りもできず匆匆退散。「私達へこんだところに落ちて大さわぎしたんですわ」とニコニコ顔で清少納言が言ったものだ。実はこの章段、逆境にあつて、叔父左大臣道長に行啓の妨害をされ、普通であれば、恨み、罵り、ふさぎこむところ、女主人中宮定子のお人柄で、春風駘蕩、清少納言は、ことにこの章段に11回「笑ふ」を用い、「をかし」を5回用いる。中宮の「御けしきもいとめでたし」と記す。殊に、楽しんで笑いさざめいて行動している、と形成するのである。

前掲本文の㊦印を参考

雑纂も、第一「必不来」で、「酔客逃席、客作偷物去、追王侯家人、把捧呼狗、窮措大喚妓女」と、何れも、苦味の利いた諧謔味をもつ。「相不似」の「肥大新婦」は、ほほえましいコミック、「不解飲弟子」、「老翁入娼家」は、ちと意地がわるいコミックであろう。「意想」の「腹大師尼似有孕」はお品がわるいコミックである。「相似」の「京官似冬瓜暗長、鴉似措大饑寒則吟、印似嬰兒常隨身、臯官似虎動則害人、尼姑似鼠入深處、燕似尼姑有伴方行、婢似貓矮處便住」辛口、ほほえましいコミックである。

枕草子の「にくきもの」の項下の㊦印は、何れも、一味あつておもしろい。サロンで、やんやの喝采をうることを疑なし。諧謔の利いたものである。「蚤もいとにくし……」にいたつては抱腹絶倒のものであろう。蚤・蚊・蟻に対しても、彼女はいかに鋭い観察をしていったか。形成の巧みさには舌をまく外ない、笑いながら。

枕草子の諧謔には、雑纂のもつ卑俗さ㊦印はない。時としては、意地のわるいものも、ままだあるが、大部分が、ほほえましい諧謔である。それらも、たとえば「見苦しきもの」の昼寝の條で、手きびしいことをいうが、「私共お互いさまなんだけど」……という雰囲気で語る㊦印の諧謔に富んだ結びで、すっかり楽しくなるのである。雑纂は、サロンの所産ではなく、意地悪さ、辛辣なうがち、で通す。そこに辛味の味があつて面白い。両者の、これまた本質的な相違である。